

大寒波の中での国家試験、本当にお疲れ様でした。心から労をねぎらいたと思います。
試験から解放されてホッとされている方も、来年のチャレンジを誓っている方も、日々の暮らしのペースを取り戻して、次のステップへと向かって行きましょう。

※次回の養成所ニュースプラスは3月中旬頃を予定しています。

■Plus Column

【文化の裾野はどこまでも】

冬季オリンピックが始まり、まもなくパラリンピックも開催されます。今でこそ広く知られるようになったパラリンピックですが、大会名が併記されて報道されるようになったのは、そんなに古いことではありません。少なくとも国際障害者年（1981）より前には、新聞でもスポーツ欄ではなく、社会面に「リハビリ的」な意味合いで紹介され、選手は「出場者」であり「アスリート」とは捉えられていなかったように思います。

80年代には国際障害者年に触発された様々な活動が生み出されましたが、83年に大阪で重度身体障害者による「劇団態変（たいへん）」が活動を開始したこともそのひとつといえます。海外公演も20回を超えるなど、芸術性が国内外で高く評価され、その活動は30年以上続いています。

旗揚げ公演のスローガンは「国際障害者年をぶっとばせ！」という、やや挑発的なもので、メディアによく登場する「健気に頑張る障害者像」に対して、社会の価値観を揺るがそうという意図が感じられる舞台だったように記憶しています。セリフは一切なく、衣装は身体の形がはっきり浮き上がるレオタードなどの基本的なスタイルは現在も同じですが、当初のメッセージ性の強い内容や身体の多様さや可能性の表現を経て、『美を追求する身体芸術』として世界観、宇宙観が表現される舞台となってきているように思えます。

昨年のNHK紅白歌合戦では義足のダンサーが登場して話題となりましたが、日本では以前から車椅子ダンスや障害者プロレスなどが行われ、一定のファン層を獲得しています。「NHKみんなのうた」にその楽曲がとりあげられて話題を呼んだ知的障害者を中心とするロックバンド「サルサガムテープ」も1994年から活動を開始し、現在も活発にライブ活動が続けられています。

パラリンピックはスポーツだけでなく、文化的な活動にも重きがおかれ、2020東京大会に向けて、音楽やダンス、演劇、「アールブリュット」といわれる芸術のイベントなども、併せて取り組みが進められています。人間の営みとしての福祉は“文化そのもの”なのではないでしょうか。

皆さんには文化や芸術に関心を寄せる、心豊かなソーシャルワーカーとして、今後も幅広く活躍していただきたいと思います。

■Back Number

過去のバックナンバーはこちら→http://www.aigo.or.jp/yoseijo/?page_id=2686

※掲載内容の転載・再配布はご遠慮ください。

※メール内容に対する個別の対応は行っておりません。

※問い合わせ等については社会福祉士養成所ホームページより行えます。

〒105-0013 東京都港区浜松町 2-7-19KDX 浜松町ビル 6F

Copyright2016 YoseijoNewsplus

発信者： 公益財団法人 日本知的障害者福祉協会